「桃花源記」の具現化現象
―桃源県における文化景観をめぐって

小林佳廸

一　はじめに

周知のように、「桃花源記」は、陶淵明（三六五～四二七）が小説的表現で著した散文であり、現代の中国でも「千古に流伝した名作」[1]と称えられている。「桃花源記」の主な内容は、道に迷った武陵の漁夫が、山洞の奥にある村里に入りこみ、そこで人々が世の変遷を知らずに、平和で裕福な生活を楽しんでいる「桃花源」を発見した。彼はそこで大いに歓待されて帰り、後に再び尋ねようとしたが、二度とその山洞は見つからなかった、というものである。[2]

「桃花源記」の具現化現象は、晋代以降最も早い時期に現れた文学作品の具現化現象の一つである。

ここでいう「文学作品の具現化現象」とは、作品における虚構上の内容が実際の「場」と結び付けられ、実物の形で再現される現象である。言い換えれば、物語中の架空の人物、事件、風景などが、現実に存在していたものとして見なされ、文化景観の形で再イメージされるという、文学作品の受容過程において見られる文化的現象である。

そして、「文化景観」とは、人間がその形成に参与した風景や、更にはその地域の文化に影響を与えた地名や風習などを含んで呼ばれることもある。それについて、例えば、記号学の見方では、「風景がある瞬間を切り取った記号であるのに対して、景観は時を経た積み重ねの結果、形成された記号として了解される。[3]」と説明され、人文地理学においては、「文化景観は物質的文化景観と非物質的文化景観に分けられ、物質的文化景観とは、色と形をもつ文化景観を指し、町や村、建築や飾り、即ち、人間の目で捉えることのできる具体的なものである。非物質的文化景観とは、直接に感知できぬ、景観の発展に大きな影響を与

える風習や信仰、考え方や暮し向きなどの無形のものを指す。[4]」という解釈がある。

「桃花源記」の具現化現象の最初の出現地点は、現在の湖南省常徳市桃源県一帯の地域である。そこは、漢代では、「武陵郡」に属し、後の時代に色々と名前が変ったが、「武陵」と呼ばれた時期が長かった。[5]「桃花源記」が世に出た後、当時の「武陵郡」で「桃花源記」に書かれた風景に似ている場所が見いだされ、人々はそこを「桃花源記」中の「武陵」だと思いなし、「桃花源記」中の言葉やプロットを引用して、そこに地名をつけたり、「桃花源記」を基にその場所の風景と環境を整えたり、関連のある建造物を造ったりしてきた。

このような、「桃花源記」中の虚構上の風景を現実に存在していたものと見なし、地名や建物、石碑や摩崖刻石、扁額や対聯などの表現で、「桃花源記」の内容は単に架空の物語であるというだけではなく、それがあたかも実際に存在したことであるかのように示す現象を、ここでは「桃花源記」の具現化現象ということにする。そして、「桃花源記」に基づく地名は、「桃花源記」の発生地を示す具体的な形のない非物質的文化景観であり、建物や石碑、摩崖刻石、扁額、対聯などの「桃花源記」の内容を再現、記念、評価するものは、目で捉えることのできる物質的文化景観と言うことができる。

「桃花源記」について見られる具現化現象は、文化人だけではなく、民間社会全体の参与が加えられた、中国の人文環境に長期に渡って影響を与え、そして、その影響が現在にまで至る文化的現象であるために、「桃花源記」の受容史に関る研究課題として興味深いものである。更に、「桃花源記」は中国古典文学史において、晋代以降の文学発展に影響力のある重要な作品として、その具現化現象に対する研究は中国古典文学受容史全体の研究にも意味があることだと考えられる。だが、それは、近年になって益々重視されるようになってきた中国古典文学受容史の研究領域においても、まだ十分な検討が加えられているとは言いがたい。[6]

一方、「桃花源記」の具現化現象は、湖南省常徳市桃源県だけではなく、「武陵郡」以外の地域にも見られる文化現象である。しかし、その中でも、この桃源県で見られる具現化現象は、すでに述べたように最初のものであり、そして最も長い歴史的過程を持つものでもある。したがって、小論では、その文化景観を例にして、「桃花源記」の具現化現象を述べ、「桃花源記」の受容史におけるもう一

つの側面を示したい。

二 「桃花源」と「桃源」

晩清の思想家梁啓超（一八七三～一九二九）は「陶淵明之文藝及其品格」で「桃花源記」を分析し、「桃源は、後の時代に県名となった」と、「桃花源記」に基づく「桃源県」という地名は「桃花源記」の影響力によるものだと指摘している。

「この『記』は唐以前における最初の小説であろう。…（略）私はこの小説を東方のUtopia（烏托邦）と名付けたい。…（略）桃源は、後の時代に県名となった。こういうところからも、この小説の大きな影響力が見える。[7]」

梁啓超の言った「桃源」と名付けられた県は現在の湖南省常徳市の桃源県である。この県名の由来について、『明一統志』は、「桃源縣在府城西八十里。本東漢沅南縣，地屬武陵郡。隋省入武陵縣，屬朗州。唐仍舊。乾德中始析置桃源縣。以其地有桃花源故名。元元貞初陞爲州。本朝洪武三年復改爲縣。[8]」と述べ、つまり、桃源県が漢代では「沅南県」であって、「武陵郡」の一部でもあった。宋代の乾德年間（九六三～九六七）の初めから「桃源県」として行政区画され、その理由は、「桃花源」という場所があったことにある、ということである。

さて、この文に現れる「桃花源」という地名は何時から使われるようになったのかは、大変興味深い点である。それによって、「桃花源記」の具現化現象の桃源県での出現と定着の時期が推定できるだろうと考えているからである。これを明らかにするために、「桃花源記」が世に出た以後の地理・地方志類史料や詩文などを調べた。その結果、「桃花源」の地名は南北朝時代（四二〇～五八九）にすでに用いられていたという結論を得た。

まず、北魏の酈道元（四六六？～五二七）が著した『水経注』の記載を見る。ここでは、沅南県の地理・人文環境について記述すると同時に、沅南県における幾つかの地名（下線部参照）を記録しているが、「桃花源」と「桃源」については言及されていない。

「臨沅縣與沅南縣分水，沅南縣西有夷望山，孤竦中流，浮嶮四絕，昔有蠻民避寇居之，故謂之夷望也。南有夷望溪，水南出重山，遠注沅，沅水又東得關下山，東帶關溪，瀉注沅瀆，沅水又東歷臨沅縣西，爲明月池，白璧灣灣，狀半月，清潭鏡澈，上則風籟空傳，下則泉響不斷，行者莫不擁檝嬉游，徘徊愛玩。沅水又東歷三石澗，鼎足均跱，秀若削成，其側茂竹便娟，致可玩也。又東帶緑蘿山，頹巖臨

水，懸蘿釣渚，漁詠幽谷，浮響若鍾。」[9]

この記載に現れる「夷望山」と「緑蘿山」という山名は現在でも使われている地名である。「緑蘿山」は現在の桃源県の西南にあり（附図参照）、中心部から約三キロほど離れ、「夷望山」はそれより更に西へ、約三十キロほど離れた地にある。現在の「桃花源」はその間に位置し、桃源県中心部より約十五キロほど離れ、この二つの山と並んで、沅水の東南岸側にある。したがって、酈道元が『水経注』を著した五世紀には、「夷望山」と「緑蘿山」との間の地域は地理書に書かれるほどの価値のある場所ではなかったと考えられるであろう。

宋代の『太平御覧』には、黄閔が撰した『武陵記』から引いた「黄閲山」に関する記述がある。それによると、黄道真という臨沅の人が山で魚釣りをした時に「桃花源」に入り込んだ。陶淵明には「桃花源記」がある、という。[10] 黄閔は南北朝の武陵の人で、[11] このことから、「桃花源」という地名は、遅くとも南北朝の時代から存在したもので、黄閔のように、「桃花源」を「桃花源記」と結びつけて考えていた人が当時すでにいた、ということがわかる。

唐代に入って、「桃花源」は「桃花源記」の舞台として詩人たちに詠われていた。その中で、王維（？～七六一）の「采菱渡頭風急，策杖林西日斜。杏樹壇邊漁父，桃花源裏人家。」と貞元年間（七八五～八〇四）の郎中劉商[12]の「桃花流出武陵洞，夢想仙家雲樹春。今看水入洞中去，却是桃花源裏人。」の二首が代表的なものとして挙げられる。[13]

一方、「桃花源」は「桃源」と略称されている。それは、王昌齢（？～七五六？）の詩「欲訪桃源入溪路，忽聞雞犬使人疑。先賢盛説桃花源，塵忝何堪武陵郡。聞道秦時避地人，至今不與人通問。」に「桃花源」と「桃源」が同時に使われていることからわかる。[14]

そして、「桃源」は県名として用いられる以前には、唐の帝室により、道観「桃源観」の名称として、更にその道観の所在地「桃源山」という山名として用いられたものであることは、後世の資料であるが、宋代の『輿地碑記目』と清代の地方志『嘉靖常徳府志』に記されている。

宋代の『輿地碑記目』「常徳府碑記」によれば、「桃源山界記『集古録』云：唐狄中立撰，徐元書并篆額。開成五年立。」[15] つまり、常徳府には『桃源山界記』という石碑があり、唐代の狄中立の撰で、唐の開成五年（八四〇）に立てられたものである、という。

清代の『嘉靖常徳府志』によると、桃花源における「桃源洞天」の営造は唐代の大暦、貞元年間（七六六～八〇

四）に行われたことで、しかも、帝室に主導されたことでもあった。その結果、東晋時代（三一七～四二〇）の道観「桃川万年観」が「桃源観」となって、「桃源観」と「桃源新壇」という二つの石碑がその経緯を記録しているが、その銘文は風化して解読できなくなっている、という。[16]

この記述における「洞天」とは、「桃源洞」が道教による第三十五番目の「洞天」であることを指している。それは、宋代の『記纂淵海』において、「三十六小洞天…（略）第三十五桃源山洞。周回十餘里，名白馬玄光之天。秦時有千餘人入洞避難，後不出，皆得道，即黄平瞿真人煉丹上昇處。在鼎州武陵縣。」[17]と説明されているが、その「秦人避難」という内容は、「桃花源記」に付された詩にある「嬴氏亂天紀，賢者避其世。」によるものだと考えられる。よって、この道教の名所「桃源洞天」及びそこに建てられた道観は、実際に、「桃花源記」に描かれた「場」を宗教的なイメージで再表現した文化景観だと言えよう。

以上の二つの史料を総合して見れば、「桃源」の地名が道観名、そして山名として使われたことがあるということがわかる。その後、宋代に至って、乾徳元年（九六三）に「桃源」は県名になった。[18]

以上、「桃源県」の県名の由来とされた「桃花源」という地名は、五～六世紀の地理書『水経注』には見られないが、同じ時期の地方志において「桃花源記」と関係付けられた地名として用いられた例があり、唐代から、「桃花源」は帝室に関心を寄せられ、その略称「桃源」は十世紀の宋代から行政上の県名として定められた、という「桃花源記」に基づいた地名の出現と定着について述べた。この流れから、「桃花源記」の具現化表現、即ち地名という非物質的文化景観は、数百年の長い年月を経て現実の土地に根付いた過程が見られた。

そして、その過程が長期に及んだことにより、「桃花源記」はその地域に与えた影響が次第に大きくなり、「桃花源記」に基づいて造られた文化景観も、各時代の受容のあり方を示して多彩なものとなっていった。

次に、「桃花渓」と「桃源洞」、「秦人洞」と「秦人古洞」を中心とした、唐代から清代までの文化景観群を例にして、「桃花源」における文化景観の主な形態およびそれぞれの特徴について述べる。

三、「桃花渓」と「桃源洞」

まず、自然景観が「桃花源記」と結び付けられることによって、文化景観的な要素を付加され、その周辺に更に

「桃花源記」の主題を強調する文化景観が造られた例として、以下に「桃花溪」と「桃源洞」について見る。

「桃花溪」は、桃源から沅水に流れ込む小さな渓流である。この渓流については、唐代の『元和郡縣圖志』や宋代の『興地廣記』[19]、『方輿勝覧』などの史料には記録が見られないが、唐代の張旭には「桃花谿」詩があり、そこの風景を詠っている。[20] この詩の中の「石磯西畔問漁船」と「桃花盡日隨流水，洞在清谿何處邊。」という描写は、「桃花源記」における漁夫が漁船を岸辺に置き、桃花の流れる渓水に沿って、山洞に辿り着いたというプロットによるものだと考えられる。

そして、「桃花源記」の冒頭の有名な「武陵人捕魚爲業；緣溪行，忘路之遠近。忽逢桃花林夾岸，數百歩中無雜樹，芳華鮮美，落英繽紛。」[21]という描写は、「桃花溪」の両岸には「桃花林」があると物語っている。この「桃花林」の中に流れる「桃花溪」のイメージを表現するために、唐宋時代では、「桃花溪」の両岸に「桃花林」が植えられ、「桃花源記」の内容が忠実に再現された。この人工的「桃花林」は唐宋期の詩人たちに詠われて、晩唐の曹唐には「桃花夾岸杳何之，花滿春山水去遲。三宿武陵溪上月，始知人世有春時。」という詩があり、[22]「桃花林」が渓流を挟むさまを描いている。そして、韓愈（七六八～八二四）の詩に見られる「種桃處處惟開花，川原近遠蒸紅霞。」と、王安石（一〇二一～一〇八六）の詩にある「亦有桃源種桃者，此來種桃經幾春。」[23]に用いられた「種桃」という言葉が当時の「桃花林」は人工的なものであることを明示している。

この「桃花林」の維持への努力が後の時代までも見られている。例えば、清の嘉慶（一七九六～一八二〇）から道光年間（一八二一～一八五〇）にかけて約三百本の桃が植えられたという。[24]

また、「桃花溪」と「桃花林」を詠う唐宋期の詩文は、当時から石碑として造られ、清の同治八年（一八六九）に再び造り直された。[25]

さて、陶淵明の「桃花源記」には「山有小口」という山洞があり、それは物語の展開のポイントとなる「場」であるために、実物の「桃源洞」に対して、人々が最も関心を寄せた。したがって、「桃花溪」と「桃花林」及びその周辺の石碑と比べて、「桃源洞」とその付近のものは唐宋期の「桃花源」において核心部をなす文化景観となった。

更に、「桃源洞」が穿たれた洞窟ではなく、「門」のような形状が見えるだけの岩に過ぎないことであるために（写

真参照)、唐宋期の詩人に「絶壁相欹是洞門，昔人從此入仙源。」、「武陵溪畔古桃源，洞合空勞記往還。晉代漁郎心不轉，隨花化石在人間。」というように「仙境」の入り口として関心が寄せられて[26]、南宋の『方輿勝覧』でも、『図経』を引いて、「洞があり、門のような巨大な石に隠され、霊跡がありありと現存する。」と記されている[27]。ここで「霊跡」というのは、「神仙のありか」を意味する。この「桃源洞」の「門」が「霊跡」と見なされたことから、洞口がないことこそ、「桃花源記」における漁夫がそこを離れた後、洞口がもはや失われたという内容に即して定められた物質的文化景観の特性を持つことがわかるであろう。

「桃源洞」の所在地は桃花源の桃源山の麓である。前記のように、「桃源洞」は道教の「第三十五番目の洞天」として仰がれたために、唐代の皇帝によって「桃源観」がその周辺に建てられた。

「桃源観」は「桃源洞」から山の奥へ、約一キロほど入ったところにあった。宋の徽宗は政和元年（一一一一）から、桃源山に一三三〇柱もあるという建築群を造り、そのうえ、真筆の扁額を「桃川万寿宮」に掲げさせたため、それ以降、「桃源観」は「桃川宮」と呼ばれることになった[28]。当時の「桃川宮」の規模について、南宋の姜夔（一一五五？～一二二一？）は「修廊夾五殿，重閣映千樹。規模象魏壮，回合緑陰護。」と描いている[29]。

「桃源観」から「桃川宮」への規模の拡大につれて、桃源山での「桃花源記」に基づく文化景観の主旨が深められることになった。なぜなら、唐代の桃源観から更に山の奥へ約一キロほど入った場所に、劉禹錫（七七二～八四二）の「桃源佳致碑」があったが、「桃川宮」の大規模な増築によって、「桃源佳致碑」は「桃川宮」の直前に位置するようになった。これにより、本来は関係のない「桃源佳致碑」と「桃源洞」と「桃川宮」がより密接な関係をもって人々に捉えられるようになった。つまり、「桃源佳致碑」は「霊跡」の周辺を案内するものとして、「桃源洞」はその「霊跡」への入り口として、「桃川宮」は「霊跡」にある「洞天」として捉えられた。これによって、「桃源洞」を中心とする景観構造には「桃花源記」に結び付けられた道教文化が新たな要素として付け加えられた。そして、この「桃花源」において中心的な存在となる景観構造は、後の人々に讃えられ、唐代から、数多くの「桃源洞」と「桃川宮」及び「桃源佳致碑」を記念する石碑や建物が造られた。清の地方志によると、「桃源洞」を詠う「桃源洞詩碑」

と呼ばれるものは唐代から清代までの間に計二十基が建てられ、[30]「桃川宮」を「桃花源記」と結び付けて記すものとしては明清の九基があり、[31]劉禹錫を記念するものとして、明清の三基が建てられた。[32]

以上、自然景観が「桃花源記」と結び付けられることによって、「桃花源記」の主題を強調する文化景観となり、そして、そこに唐代から清代までの数々の文化景観が付け加えられていった過程について述べた。

次に、「秦人洞」と「秦人古洞」の例を挙げて、「桃花源記」に書かれた内容をより忠実に再現する傾向を表わす文化景観について述べる。

四、「秦人洞」と「秦人古洞」

さて、桃花源には二つの山がある。一つは桃源山で、もう一つは桃花山である。前記のように、桃源山の麓には「桃源洞」があるために、そこは道教の「洞天」と見なされ、北宋時代から、朝廷の参与によって、面積的に桃源山を覆うほどの大規模な道観が造られた。新たな造営のための空間的余地がなくなったことによって、その以降の民間人と文化人による文化景観は、ほとんど「桃花山」に造られるようになった。

最初のものは「秦人洞」であった。人々は洞窟の体をなさない「桃源洞」は、「桃花源記」に描かれたものだと認めず、「桃花山」の中腹で「桃花渓」の源流が流れ出た岩の洞穴を発見したため、それを「秦人洞」と命名した。[33]この「秦人洞」は、「桃花源記」の「林盡水源，便得一山。山有小口・・・」に沿って命名したものだと考えられる。史料には、この「秦人洞」の発見された時期についての記録は見当たらないが、南宋の姜夔の「昔遊詩」では、この洞穴を訪れた時に見た光景が描かれているので、[34]「秦人洞」は遅くとも南宋にすでにあったものだと推測できるであろう。

そして、「秦人洞」のために造られた詩碑もあった。『桃源県志』の記述によると、南宋以降の「秦人洞詩碑」は四基があったという。[36]

この「秦人洞」は現在でも見られる。そこから「桃花渓」の源流が流れ出ており、近くに「桃花林」もあり、確かに、「桃花源記」に描かれた風景に似ている。しかし、その洞口は、人が入っていくには小さ過ぎるものと思われる。おそらくそのために、清代の末、人々は「桃花源記」に相応しいものとして、「秦人洞」の近くに更に大きな洞窟を造った。その洞窟こそは、光緒十四年（一八八八）に

着任した湖南省桃源県の知県余良棟が造った「秦人古洞」である。

余良棟は「桃花山」を切り開いて、数人が同時にその中を歩けるほどの広さの、八つの支洞を含む、総延長約百六十メートルに及ぶ洞窟を掘った。更に、その入り口に「秦人古洞」の題字を彫り付けて名付け、その周辺に、窮林橋、水源亭、豁然亭、桃花潭漁人従入処、延至館、漁人辞去処、既出亭、向路橋、問津亭、高挙閣、尋契亭などの数多くの建造物を造り[36]、全ての建造物に「桃花源記」に使われた言葉を引用して命名した。それらの建物名と「桃花源記」との関連を以下の表に示す。

表　「桃花源」の建造物名と「桃花源記」原文との関連

「桃花源記」原文	建造物名
復前行，欲窮其林。	窮林橋
林盡水源，便得一山。	水源亭
豁然開朗	豁然亭
便捨船従口入。	桃花潭漁人従入処
餘人各復延至其家，	延至館
停数日，辞去。	漁人辞去処
既出，得其船，	既出亭
便扶向路，處處誌之。	向路橋
後遂無問津者。	問津亭
高舉尋吾契。	高挙閣
高舉尋吾契。	尋吾亭

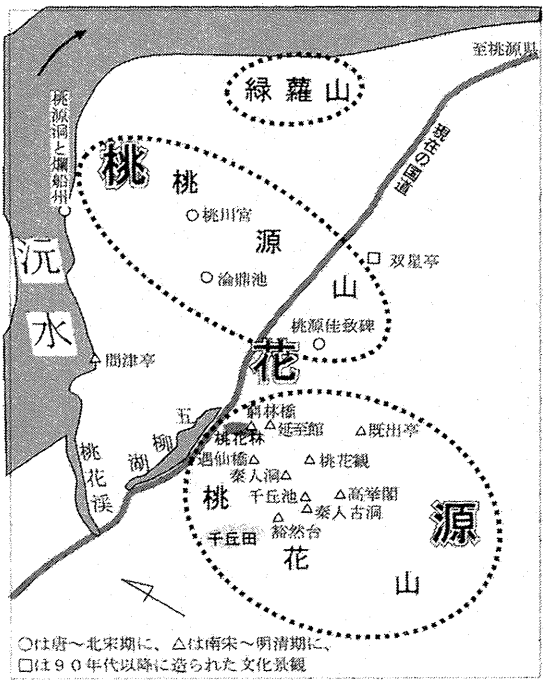
このように一つ一つの文化景観を「桃花源記」と結び付け、命名し、更にそれを扁額にして建物に掲げるというような「桃花源記」を具現化する手法が用いられたことによって、桃花山における文化景観は、桃源山のものと比べて、より直截的に「桃花源記」の内容に沿うものとなったという特徴を示している。その結果、「桃花山」の文化景観群は、清代光緒年間以降、「桃花源」における中心的な存在となり、その影響は現在までに至る。

五．おわりに

以上、湖南省常徳市桃源県の各時代で形成された文化景観を例にして、「桃花源記」の具現化現象について述べ

た。

言うまでもなく、「桃花源記」の他にも、中国古典文学作品には、長い歴史において各地域で再表現され、中国の人文環境にそれぞれの文学的主題を与えていたものも多い。今後は、文学作品の具現化現象の問題について更に探求し、中国古典文学作品の受容史をより深く認識していきたいと考えている。



↑附図
桃花源の文化景観の配置

↑写真
桃源山の麓における桃源洞、と爛船州（二〇〇三年八月撮影）

（本稿は、二〇〇三年六月二十八日平成十五年度中国文化学会大会における口頭発表をまとめ、加筆訂正したものである。）

注釈

（1）「大約在晋宋易代前后，他写了《桃花源诗并记》这篇流传千古的作品。」（中国大百科全書編集部編『中国大百科全書 中国文学』中国大百科全書出版社一九八六，八五三頁参照。）

（2）逯欽立校注『陶淵明集』中華書局一九七八，一六五～一六六頁参照。

（3）坂本百大等編集『記号学大辞典』柏書房二〇〇二，一三一頁参照。

（4）陳慧琳主編『人文地理学』科学出版社二〇〇一，一〇七頁参照。

（5）［宋］欧陽忞撰『輿地廣記』卷二十七　中華書局一九八五参照。

（6）尚学鋒著『中国古典文学接受史』山東教育出版社二〇〇〇、尚永亮著『荘楚伝播接受史総論』文化芸術出版社二〇〇〇、李剣鋒著『元前陶淵明接受史』斉魯書社二〇〇二参照。

（7）原文は、「梁启超恭维"这篇《记》可以说是唐以前第一篇小说。在文学史上算是极有价值的创作。这一点让我论小说沿革时再详细说他。至于这篇文章的内容，我想起他一个名叫东方的Utopia（乌托邦）。所描写的是一个极自由极平等之爱的社会。荀子所谓，美善相乐，唯此足以当之。桃源后世竟变成县名，小说力量之大，也无出其右了。」（《陶淵明之文藝及其品格》）」というものである。（鐘優民著『陶学発展史』吉林教育出版社二〇〇〇，二八二頁参照。）

（8）［明］李賢等撰『明一統志』卷六十四　積秀堂梓行，天順五年万寿堂刊本

（9）王国維校、袁英光、劉寅生整理標点『水経注校』上海人民出版社一九八四，一一七三～一一七四頁参照。

（10）『武陵記』曰：昔有臨沅黄道真，在黄聞山側釣魚，因入桃花源。陶潛有『桃花源記』。今山下有潭，立名黄聞。此蓋聞道真所説，遂爲其名也。」（［宋］李昉等撰『太平御覧』卷四十九・地部十四「西楚南越諸山・黄聞山」中華書局一九六〇）

（11）「南北朝范安祖，…（略）伍安貧，…（略）黄閔，武陵人。博學有詞藝。撰『沅州志』。唐章懐太子註『郡國志』取之爲證。」（前掲『明一統志』卷六十四）

（12）『劉商詩集』十卷。貞元比部郎中。」（［宋］欧陽修、宋祁撰『新唐書』卷六十「芸文志第五十」中華書局一九七五）

（13）『全唐詩』卷十三「王維・田園」、卷三百四「劉商・題水洞二首」中華書局一九六〇参照。

（14）前掲『全唐詩』卷一百四十三「王昌齢・武陵開元觀黄鍊師院三首」

(15)［宋］王象之撰『輿地碑記目』巻三「常徳府碑記」粤雅堂叢書，咸豊十年［南海］［伍氏］刊本

(16)「桃川万年観，県西南三十五里，晋人建。唐爲桃源観。」『桃源洞志』，洞天嘗葺，唐以前無聞。…（略）宇之建自大曆，貞元年間，碑碣所載，『桃源観』，『桃源新壇』俱頽漫不可考。」（「清」馬慧裕撰，應先烈譔『嘉靖常徳府志』巻十二「寺観」，巻六「山川考古蹟」嘉慶十八年輯，常徳府衙蔵板参照。）

(17)［宋］潘自牧撰『記纂淵海』巻八十六「仙道部・神仙」『景印文淵閣四庫全書』台湾商務印書館一九八六参照。

(18)「皇朝乾徳元年析武陵，置桃源縣。」（前掲『輿地廣記』巻三十七）

(19)［唐］李吉甫撰，［清］繆荃孫輯，賀次君点校『元和郡縣図志』巻三十一「江南道黔州六」中華書局一九八三，前掲『輿地廣記』巻二十七，［宋］祝穆撰『方輿勝覧』巻三十（孔氏嶽雪楼影鈔本，揚州・江蘇広陵古刻印社一九九二），前掲『明一統志』巻六十四参照。

(20)「隱隱飛橋隔野烟，石磯西畔問漁船。桃花盡日随流水，洞在清谿何處邊？」（前掲『全唐詩』巻一百十七「張旭・桃花谿」）

張旭については，『中国大百科全書 中国文学』には「生没年不詳，中宗神龍年間（七〇五～七〇七）の「呉中四士」の一人」という記載がある。（前掲『中国大百科全書 中国文学』一二三九頁参照。）

(21) 前掲『陶淵明集』一六五頁参照。

(22) 前掲『全唐詩』巻六百四十一「曹唐・題武陵洞五首」参照。

曹唐については，『中国大百科全書 中国文学』には「咸通年間（八六〇～八七四）で使府従事に赴任した」という記載がある。（前掲『中国大百科全書 中国文学』五五頁参照。）

(23) 前掲『全唐詩』巻三百三十八「韓愈・桃源図」，［宋］王安石撰『臨川文集』巻四「桃源行」中華書局一九五九参照。

(24) 李福軍編著『走進桃花源』湖南人民出版社二〇〇三，二四，二六頁

(25)［清］余良棟修，劉鳳苞纂『桃源県志』巻十二 清光緒十八年刊本

(26) 前掲『全唐詩』巻六百六十九「章碣・桃源」，［宋］周必大撰『文忠集』巻四十三「古律詩六十八首」『景印文淵閣四庫全書』台湾商務印書館一九八六参照。

(27)「桃源山在――縣二十里。『圖經』云：山下有桃川宮。西南一里即桃源洞。云是昔秦人避亂之地。有洞如門，巨石屏蔽，靈跡猶存。有水自中流出，涓涓不絕。」（前掲『方輿勝覧』巻三十）

(28) 前掲『常徳府志』巻六「山川考古蹟」参照。

(29)［宋］陳起編『江湖小集』巻五十六「姜夔白石道人詩集・巻六・昔遊詩」『景印文淵閣四庫全書』台湾商務印書館一九八六参照。

(30) 前掲『桃源県志』巻十二参照。
(31) 前掲『桃源県志』巻十二参照。
(32) 前掲『桃源県志』巻十二参照。
(33) [明] 鄭天佐、李徵纂『[万暦] 桃源県志』「山川」日本尊経閣文庫明万暦四年刻本影印，書目文献出版社一九九二参照。
(34) 「昔遊桃源山，先次白馬渡。…（略）山行轉深邃，狙猿紛上下。石竇出微涓，令我意猶豫。昔聞漁舟子，水際見洞戸。今看去溪遠，定自後人誤。」（前掲『江湖小集』「昔遊詩」参照。）
(35) 前掲『桃源県志』巻十二参照。
(36) 前掲『桃源県志』巻一参照。

（東京都立大学大学院）